

語用論レベルでの中間言語

—日本語における断りの方略と構造—

川手-ミヅエイフスカ 恩
(テンプル大学ジャパン)

0. はじめに

多くの発話行為の中で、その方略と構造が最も複雑で難しいものの一つに「断り」が考えられるであろう。「断り」における発話行為上の誤解は、母語話者同士の会話において生じることもあるが、異文化間でのコミュニケーションにおいてはそれ以上に生じるものであると考えられる (cf. Kawate-Mierzejewska, 1995)。「断り」を包含する発話は意味公式¹ (e.g., Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz, 1990; 生駒 & 志村, 1993) という単位に分類してみても分かるように様々なものがあり (e.g., 「謝罪」、「遺憾」、「言い訳」、「希望」、「感謝」、「回避」)、状況や会話の相手、会話の内容によって使い分けられているが、実際に断る際には、一回のターンでは断りきれず何回ものターンを要する事もあるし、また一回の会話では断りきれず時間を置いて次回の会話、またその次の会話でというように何回もの会話にまで及んでしまう事もあるようだ。以上のような訳で、日本語教育においてこの複雑な発話行為を適切に指導して行く為にも、「断り」の実態を把握しておく必要があると考えられる。

そこで、本稿では手始めに、日本語の電話会話の資料を用いて異文化間での会話における「断り」を母語話者同士のそれと比較し、日本語母語話者(JJ)とアメリカ英語母語話者(AJ)の日本語での「断り」における類似点や相違点の解明を試みる。

1. 先行研究と目的

先行研究より学習者は学習言語(TL)を習得する際に語用論レベルでも母語による干渉を受ける(プラグマティック トランスファー)と言うことが明らかにされている (Kawate-Mierzejewska, 1999)。Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz (1990)は日本人英語学習者は英語での「断り」において TL である英語にはみられない日本語でのそれにおける意味公式を用いたり「断り」の展開を見せたりすると報告している。また、生駒 & 志村(1993)はアメリカ人日本語学習者(AJs)は日本語での「断り」において英語からの直接のトランスファーを用いる(e.g., 「...出来ません」 'I can't...'; 「結構です」 'No, thank you') 傾向もあると指摘している。更に志村(1993)は、断る際に使われる「中途終了文」に注目し、JJsの方がAJsの二倍ちかくもそれを用いる事を指摘し、その使われ方においても JJsは自分より上の立場にある人間にたいしてよく使うのに対しAJsは自分より低い立場にある人間にたいしてのみ使っていたと報告している。これらの報告からも伺えるように日本語学習者とJJsの「断り」には違いがあるようだ。アジア人日本語学習者とJJsによる「断り」の意味公式や展開²の違いの報告 (熊井, 1992; 1993)、東南アジア人日本語学習者とJJsによる「断り」の文末表現(e.g., 「...かな」)や「断り」への付随物(e.g., 「う～ん」)などの使われ方の相違点を明らかにした報告(Laohaburanakit, 1997)や日本語での「断り」の理解に関する報告(目黒, 1994)などもある。

以上のように、多くの先行研究があるが、この分野で、実際の会話³の中でみられた「断り」を分析したり「断り」の展開を談話レベルで分析した研究はまだまだ少ないように見受けられるので、本稿ではJJとAJによる日本語での実際の電話会話における「断り」の方略(意味公式)と構造(展開)、更に「断り」として使われた言い訳の種類を分析しJJとAJの断り方の類似点や相違点の解明を試みる。⁴

2. 研究事項

JJとAJの断り方の類似点と相違点を下記の5点より考察してみる。

- (1) 「断り」の中で用いられた意味公式
- (2) 「断り」の談話の構造 (会話の中での「断り」の展開の仕方)
- (3) 「間をもたせる表現(pause filler)」の使われ方
- (4) 「言い訳/口実(理由、説明も含む)」の内容
- (5) その他 (上記の4つのポイント以外で目立った事項)

3. 研究方法

3-1 被験者

東京周辺に住む30代から40代前半の2人のJJs(翻訳家と大学院生)と1人のAJ(英語教師)がこのパイロットステディに参加した。AJの日本語は上級で、このパイロットステディに参加した時点で日本に10年以上居住していた。

3-2 研究手順

JJの一人がもう一人のJJとAJそれぞれに電話をかけて、友達との日本語での電話の会話を録音してくれるように依頼している会話を録音した。依頼者であるJJと依頼をされたJJ、AJとの関係は友人で同等(equal status)であった。録音した際、録音の承諾は録音する前にもらった。⁵

3-3 データ分析

まず録音したテープをおこし、起こした会話を「依頼」と「断り」の流れにそってステージ1、ステージ2...というようにステージ(stages)に分けた(cf. Kawate-Mierzejewska, 1999)。一回の「依頼」とそれへの返答としての「断り」を一つのまとまりと考えそれぞれのステージはそのまとまりによって分けられた。つまり、下記の例1のように、ステージ1は最初の依頼(initial request)とそれに対する「断り」(refusal[s])により構成され二度めの依頼(re-request)からステージ2になる(Appendix 1 for transcription conventions 参照)。

例1 日本語母語話者同士の会話 (A=依頼者: B=依頼される人)

ステージ1 (stage 1)

- ⇒35. A: =そうゆうのを さあ あのう テープにとってくれる人さがしているんだけど [依頼]
→ (2.0) [沈黙]
→36. B: うう::ん、ふ ふっ [ふっ ふっ。]= [断りへの付随物]
37. A: [ふ ふ ふ。]
→38. B: =とって(.1)くれるたって さああ 機会がなくちゃとれないじゃない。
[依頼の一部の繰り返し+思いとどませようとする試み]
39. A: 機械はもちろん (.1) 用意するんだけど.....
40. B: うん うん うん。
41. A: うん うん うん。
→42. B: あっ じゃあなに どうゆうことなの。 なつが= [与えられた情報の確認]
43. A: うん。
→44. B: =誰かに電話をしたいわけ?

ステージ2 (stage 2)

45. A: じゃないの。 あきが たとえば 誰かに電話をしてるとか してる してるとか あのう かかってきたとこ とことか= 情報の提供が続く—
⇒51. A: =うん。 そゆうのを あのう:: テープにとってくれないかなあ::とって..... [2回目の依頼]
→52. B: どうやってとるの? [情報の要求]
53. A: どうやってって?
→54. B: あのう具体的には?
55. A: 機械のこと?
→56. B: あっ そう そう そう そう。 —ターン57-95は要求された情報の提供—
97. A: うん うん うん。
→98. B: うう::ん。 でも うちあんまり電話がかかってこないし へっ へっ へっ かけないよ 今。
[言い訳]⁶

それから、会話の中で使用された「断り」を包含する発話を、訓練を受けた2人のコーダーにより、Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz (1990)によって考案されたものに手を加えて修正された意味公式(Appendix 2)を利用して分類した(データ分類者間信頼性=88%)。そして、分類されたそれぞれの意味公式の頻度を算出しJJとAJの意味公式の使用頻度を比較、考察したり、「断り」の展開を談話レベルで考察した。更に、「間を持たせる表現」の用いられ方や「断り」の意味公式の一つである「言い訳/口実(理由、説明も含む)」の内容についても吟味してみた。「言い訳」はまず「本意」「負担」「不可能」(Appendix 2)に分け、それぞれについて「言い訳」の根拠を断る自分自身においているものか、それとも自分ではなく第三者のせいにしてしているものかを更にわけた。また、それぞれの「言い訳」について特定のものであるか否か(specific vs. unspecific)⁷、そして公のものであるか私的なものであるか(official vs. private)⁸に分けた。

4. 研究結果

(1) 用いられた意味公式の頻度

「謝罪 残念に思う気持ち」(e.g., 「ごめん」), 「代案の揭示」(e.g., 「... ご 近所とかそうゆうとこでやれ

ばいいんじゃないの」)、「相手を思いとどませようとする試み」(e.g., 例1 ターン 38 参)、「願望」(e.g., 「あればやってあげたいとは思うんだけど...」)、「答えが分かりきっている情報の要求」(e.g., 「そいでその都度じゃあ電話なに受話器とったらそのテープのカセットのボタンを押さなくちゃいけない訳?」)、「依頼者の返答の繰り返し」(e.g., 「勿論お貸しして下さるの?」)、「ちょっと」(e.g., 「ちょっとねえ、ふっ ふっ」)はJJ によってのみ用いられ、「はっきりしない言葉をはっきりさせる」(e.g., 「あっ ああ えっ?」)はAJ によってのみ使われた。また、「言い訳」(e.g., 例1 ターン 98 参)、「沈黙」、「否定的な感情を表しているだろうあいづち」(e.g., ううん[重くどっしりと下がりぎみ])はJJ と AJ の両者によって使われた。

(2) 「断り」の談話の構造

例2 日本語母語話者 (A=依頼者)とアメリカ英語母語話者(B=依頼される人)の会話

ステージ 4 (stage 4)

- ⇒114. A: 録音ってゆうかテープに= [依頼]
 115. B: はい。
 ⇒116. A: あのう とって:::くれない(.1)かなあとって...
 →117. B: ううん。
 118. A: 電話をしました。
 →119. B: ああ:: ああ:: ああ:: (2) ううん。前はあったんですけど。 [言い訳]
 120. A: はい?

..... [会話が続く]

ステージ 6 (stage 6)

- ⇒216. A: あんまり話す機会はないですか。 [更なる依頼]
 →217. B: はあ::: 今考えている (.3) ううん。まあ あんまり し あんまりないんですね。 [言い訳]
 218. A: はあ はあ はあ はあ はあ。
 →219. B: なんか殆どこの頃は忙しいから。 [言い訳]
 220. A: はい。
 →221. B: あのう あまり約束してないし。 [言い訳]
 222. A: はい。
 →223. B: あのう なんか勉強以外あまり外に行かないし... [言い訳]
 224. A: はい はい。 あっ そうですよねえ。
 →225. B: ううん。
 226. A: 勉強忙しいですものね。
 →227. B: それから何か博士号に入ってから= [言い訳]
 228. A: うん うん うん うん。
 →229. B: ああ::: 日本語が少なくなりました。
 230. A: はあ はあ はあ はあ。
 →231. B: 前と比べると。
 232. A: ああ そうですね。
 →233. B: あのう 仕事も= [言い訳]
 234. A: うん。
 →235. B: =博士号も=
 236. A: うん うん。

→237. B: =なんかなんでも家以外のものは英語だけだから。 — 会話は更に続く —

前出の例1からも伺えるように JJ は、「言い訳」(line 98)をする前に、相手を思いとどませようとしていたり(line 38)、情報の確認(line 42)、要求(line 52)をしたりしているのに対し、例2からも分かるように AJ は JJ の依頼の後の返答ですぐ「言い訳」(lines 119&217)をしていた。

例3 日本語母語話者同士の会話 (A=依頼者: B=依頼される人)

ステージ 7 (stage 7)

- 200. B: 私 すごい忙しいのよ。 [言い訳]
 201. A: うん うん うん。
 →202. B: 夜もね。
 203. A: うん うん うん うん うん。
 →204. B: 土、日もね。
 205. A: うん うん うん。
 → (2.0) [沈黙]

→206. B: だから (1) ちょっとねえ。 ふっ ふっ。 [ちょっと statement]

— 会話には更に続く: A は B の更なる情報要求に答える —

→220. B: ううん。悪いけど、ほんとにちょっとね。 色々な事があって ある そのまあ
仕事も忙しいんだけど = [詫び + 言い訳]

221. A: はい。

→222. B: =土、日もすごく忙しいのよ、いろいろ。

223. A: うん、ふん ふん ふん。

— 会話は更に続く —

例 3 から分かるように JJ は同じ「言い訳」を繰り返していて詳しい内容にはあまりふれていないが (例 3: lines 200, 202, 204, 220, & 222)、例 2 より AJ は様々な「言い訳」を用いていて内容もだんだん詳しくなっていく傾向にあった (例 2: lines 217, 219, 221, 223, 227, 229, 231, 233, 235, & 237)。

(3) 「間をもたせる表現」の使われ方

JJ も AJ も「言い訳」をする前に断りへの付随物として「間をもたせる表現」を使っているようだが (例 1: lines 36 & 98, 例 2: lines 119 & 217, 例 3: line 220)、AJ は、「間をもたせる表現」を一つのターンとしても使っているようだ (例 2: lines 117 & 225)。

(4) 「言い訳」の内容

(4)-1 「言い訳」の種類 x 根拠

JJ は「不本意」も言い訳として使っていたが (e.g., 「あのう:: まあ ううん めんどくさい わるいけど」)、AJ にはそれは見られなかった。また、JJ も AJ も「不可能」を使っていたが AJ はしばしば、「言い訳」の根拠を断る自分自身だけでなく第三者にもおいていた⁹ (e.g., 「ほとんど colleague は英語、ううん (3) ううん まあ 日本人の友達がいるんだけど、だぶん電話したら.....(省略).....何も言わなかったらたぶん自然に英語に変わると思う」)。

(4)-2 特定のものであるか否か x 公のものであるか私的なものであるか

JJ も AJ も私的な「言い訳」を使っていたが、JJ の場合は詳しい内容には触れていない特定のものでない「言い訳」も多かった (例 3: lines 200, 202, 204, 220, & 222) のに対し、AJ の「言い訳」は特定化されていて詳しい内容にふれているものが多かった (例 2: lines 227, 229, & 231 等)。

(5) その他 (上記の 4 つのポイント以外で目立った事項)

JJ は「笑い」をまじえて依頼を断っていることもしばしばあった (e.g., lines 98 [例 1] & 206 [例 3]) が、AJ にはそのような言い方は見られなかった。

5. まとめと考察

まず、JJ の方が AJ より多くの種類の意味公式を使用していた。これは、「断り」の談話の構造により説明出来るかもしれない。つまり、JJ は他の意味公式を何種類か用いた後で「言い訳」をしているのに対し、AJ では「依頼」のすぐ後の返答でも「言い訳」が出てくるので JJ の方が AJ より多くの種類の意味公式を使ったようだ。JJ は、もし即座に依頼者の話もろくに聞かず「不可能」と言う「言い訳」など言ってしまうと人間関係を傷付けてしまう事になると考え、依頼者の反応を伺いながら「断り」とも「純粋な質問」ともとれるような情報要求を「言い訳」をする前にしたのかも知れない。Kanemoto(1993)は「断り」は人間関係を悪化させたり傷つけたりするので、日本の社会では間接的な断り方を考えなくてはならないと言う。おそらく、これは一つ一つの意味公式に於いてだけでなくここでの結果にみられたように「断り」の談話の展開においても言えることであろう。これに対して、AJ は母語であるアメリカ英語での「断り」の概念の基に Kanemoto(1993)が指摘しているように、正直に断ることにより良い人間関係を維持することができると考え依頼の後すぐに「不可能」と言う「言い訳」をしたのかも知れない。

次に「言い訳」そのものに関してだが、詳しい内容に触れてない漠然としたものも多かった JJ の「言い訳」は、JJ が第三者を根拠とした「言い訳」を使うことは殆どなく「断る」本人がその根拠となったので同じ「言い訳」の繰り返しが多く漠然としたものになったのかも知れない。また、「あまり言い訳をするのもどうか」などと言う考えの基に漠然としたものになってしまったのかも知れない。Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz (1990)は、彼らの研究を基に、日本人の被験者はアメリカ人の被験者より漠然とした不特定の「言い訳」をつくる傾向にあったと言うことを報告している。それに対して AJ においては第三者をも言い訳の根拠としたことが、様々な内容が特定化した「言い訳」が多くみられた要因となるに違いない。ここで興味深いのは、日本語の母語話者でない AJ が第三者を根拠とした、Kanemoto(1993)によればアメリカ英語にはみられず、日本語での「断り」にみられる「言い訳」の根拠を用いたのに対し、日本語母語話者である JJ はそのような根拠は使わなかったということである。勿論、「断り」の根拠は、依頼の内容によっても左右されるであろうから一概に異文化間での相違を指摘することはできないであろうが、何れにしても、この点は今後の課題の一つになりそうだ。

「間をもたせる表現」に関して考えてみると、「断り」の前置きのような感じで母語の違いに関係なく使われるのかも知れない。これは、いきなり「断り」の意味公式を使いにくいので「断り」の兆しを最初にみせ依頼者に「断り」に対するなんらかの心の準備をしてもらおうと言う試みのようでもある。また、それと同時に人間関係を傷つけまいとする試みであるに違いない。

最後に「笑い」についてだが、これは「断り」を和らげ、かどが立たないようにするための試みであると共に「断り」という難しく、避けて通れるものならその方が良いに違いない発話行為を乗り切るために自然に表れる一種の手段ように思える。また、この研究では JJ だけがこれを使っていたのだが、これは単なる偶然かもしれない。この辺りも今後の課題となりそうだ。

6. おわりに

以上、小さなパイロットスタディではあるが JJ と AJ の「断り」を談話の展開にも注目し比較してみて、類似点より相違点の方が多いことが分かった。また、一つ一つの意味公式は「断り」の談話の展開において密接な関連を持ち、重要な役割を果たしている事もわかった。「断り」の構造は談話の中で考察してこそ、その複雑さを解明できるのではないだろうか。今後の課題として、被験者の数を増やしたり、依頼者と聞き手の関係を変えたり、性別、年齢、出身地なども考慮に入れ、このパイロットスタディの結果がどこまで一般化できるのかを検証してみたい。また、データ分類者間信頼性(intercoder reliability)に関しては *kappa coefficient of agreement* *K* (e.g., Siegel & Castellan, 1988) を使用し意味公式の分類における偶然性をも考慮していきたい。

最後に、限りなく自然に近い資料を使うことと、談話の展開に注目して発話行為の流れ/構造を検討してみることの大切さを強調しておきたい。

注

- (1) 本稿では「意味公式」と「方略」は同じ意味で使われている。
- (2) 本稿では「断りの構造」と「断りの展開」は同じ意味で使われている。
- (3) ここで言う「実際の会話」とは、談話完成テストやロールプレイ等によって、作り出された状況において収集された(引き出された)会話/資料ではなく、録音された限りなく自然に近い実際の会話のことをさす。
- (4) 本研究は大きなプロジェクトのパイロットスタディとして行われたもので、結果の一般化は考えていない。
- (5) 電話をかけた際に、研究の目的で録音をさせてもらってもいいかと言うことをまず聞いて承諾をもらってから録音した。録音する前に「録音する」と言う事を言うてしまうと自然な資料が集められないという意見もあるようだが、倫理的理由より、先に承諾を得るべきであると言う結論に達した。
- (6) 本稿では、「言い訳」とは「言い訳、口実、理由、説明」の意味で使われている。
- (7) 特定の「言い訳」とは根拠のはっきりしているもの(e.g., 「殆どメールだし」[メールでやり取りをしてしまうので電話を使わないと言うこと])で、そうでないものとは根拠のはっきりとしていないもの(e.g., 「忙しいのよ」[なぜ忙しいのかわからない])。
- (8) 公な「言い訳」とは「言い訳」の根拠が客観的なものであったり自分ではコントロールできないものであり(e.g., 「殆ど colleague は英語」[自分の回りに日本語を話す友人はいないということ])私的な「言い訳」とは根拠が自分自身のプライベートなことであったり(e.g., 「殆どメールだし」)主観的なものであったりする。
- (9) JJ の場合は一回だけ第三者に「言い訳」の根拠をおいたものがあったが、同じターンで自分自身にも根拠をいっていた(例 1: line 98)。

参考文献

- (1) 生駒知子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー; 「断り」という発話行為について」『日本語教育』79, 41-52
- (2) 川手-ミヤジエフスカ 恩 (1995) 「伝達能力の育成」-「断り」という発話行為を例に語用論的視点より」『第 8 回日本語教育連絡会議報告発表論文集』30-42, Poland, Adam Mickiewicz University
- (3) 川手-ミヤジエフスカ 恩 (1999) 「母語、第二言語、中間言語からのプラグマティック・トランスファー; 「詫び」を例に語用論的視点より」『平成 11 年度日本語教育学会春季大会予稿集』、日本語教育学会、101-106
- (4) 熊井浩子 (1992) 「留学生にみられる談話行動上の問題点とその背景」『日本語学』12, 72-80
- (5) 熊井浩子 (1993) 「外国人の待遇行動の分析(2)-断り行動を中心にして」『静岡大学教養部紀要:人文社会科学篇』28(2), 1-40
- (6) 志村明彦 (1993) 「「断り」という発話行為の中における待遇表現としての省略の頻度・機能・構造に関する中間言語語用論研究」『平成 5 年度日本語教育学会春季大会予稿集』、日本語教育学会、137-141
- (7) 目黒秋子 (1994) 「間接的断りにおける「謙遜型」ストラテジー」『平成 6 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、日本語教育学会、38-41

- (8) ラオハブラナキット、カノックワン (1997) 「日本語学習者にみられる「断り」の表現—日本人話者と比べて—」『世界の日本語教育』7, 97-112
- (9) Beebe, L. M., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in refusals. In R. Scarcella, E. Andersen, & S. D. Krashen (Eds.), *Developing Communicative competence in second language*. New York: Newbury House.
- (10) Ifert, D. E., & Roloff, M. E. (1996). Responding to rejected requests: persistence and response type as functions of obstacles to compliance. *Journal of Language and Social Psychology*, 15 (1), 40-58.
- (11) Kanemoto, M. (1993). A comparative study of refusal assertion in the United States and Japan. *Ryudai review of language and literature*, 38, 199-212.
- (12) Kawate-Mierzejewska, M (1999, January). *Refusal interactions in conversational discourse*. Unpublished proposal for doctoral dissertation, Temple University Japan.
- (13) Siegel, S. & Castellan, N. J. Jr. (1988). *Nonparametric statistics: For the behavioral science: second edition*. McGraw-Hill, Inc.: New York.

APPENDIX 1

- [] 左側のカッコは会話のオーバーラップが始まる時点で、右の方はオーバーラップの終わりを示す。
- (0.0) 1/10 秒で示した沈黙の長さ
- … 長音
- = 話し手のターンが続いている印
- ? 上昇のイントネーション

APPENDIX 2

断りを構成する意味公式の分類

Indirect refusals: 間接的な断り

1. Wish: 願望 (e.g., I wish I could help you ‘協力してあげられればいいんだけど……’)
2. Statement of regret: 詫び (e.g., I’m sorry ‘悪い、ごめん、申し訳ない’)
3. Excuse including ‘reason’ & ‘explanation’: 言い訳
4. Statement of alternative: 代案の提示
5. Attempt to dissuade interlocutor: 相手を思いとどませようという試み (negative opinion, empathy)
6. Avoidance: 回避
 - a. Repetition of part of request: 依頼の一部の繰り返し
 - b. Repetition of part of requester’s response: 依頼者の提供した情報の一部の繰り返し
 - c. Silence: 沈黙
 - d. Back channel cues expressing negative feelings: 否定的感情を表すあいづち
7. Request for old information: すでに与えられている情報要求
8. Request for new information: 情報要求
9. Request for obvious information: 答えが分かりきっている情報要求
10. Request for clarification of the content of request made: 意味/理解をはっきりさせるために説明を求める試み
11. Request for clarification (vocabulary bases): 言葉の意味をはっきりさせる試み
12. Statement of ちよっと

三種類の「言い訳/口実(理由、説明も含む)」

- a. 不本意 (unwillingness: 依頼された人[被依頼者]がどうも依頼者の手助けをする気になれない)
 - b. 負担 (imposition: 依頼を引き受けて遂行するには特別に時間をさかなくてはならないことになり、突然の予測できなかった依頼が被依頼者にとって負担となるかも知れない, e.g., いそがしくてねえ……)
 - c. 不可能 (inability: 被依頼者がそれを引き受けて遂行することが不可能, e.g., テープレコーダーがこわれてるから……)
- (cf. Ifert & Roloff, 1996)